

# 『遊心安楽道』 来迎院本の包紙

愛 宕 邦 康

## 一 はじめに

昭和四十七年（一九七二）に『遊心安楽道』来迎院本の調査を行った文化庁文化財保護部美術工芸課は、

『遊心安楽道』良忍手折本

縦二六・〇、第二紙長五〇・五、三十一紙

卷子装、表紙茶地楮紙、料紙黄楮紙、墨界

〔外題〕遊心安楽道

〔尾題〕遊心安楽道一卷

〔本文〕一行十五〜十八字、一紙二十七行、無点、校合加筆

〔奥書〕一校了

〔印記〕各紙紙背継目右下ニ黒方印「雄」各一顆

〔時代〕平安後期

○包紙表書「遊心安楽道新規國元曉撰良忍上人之本」

とその調査結果を発表した。<sup>(1)</sup>この良忍（一〇七二—一一三二）手折と伝えられる『遊心安楽道』来迎院本は『遊心安楽道』

諸本のうち最古にして唯一の善本であり、『大正藏經』の底本、明曆四年（一六五八）西村九郎右衛門刊本より五百年以上も前に書写された正しく第一級資料と言えるのであるが、その一方で何時誰によつて書写されたものなのかという問題をはじめ、未だ多くの問題を抱える極めて不明瞭なものと言える事もまた事実である。中でも包紙の存在はすなわちこれが『遊心安楽道』来迎院本を良忍手折と認定する唯一の根拠であるというだけでなく、本文にない〈元曉撰〉の文字が見られる事からも注目すべきであり、その解明こそが『遊心安楽道』来迎院本研究を促進させる絶対条件の一つであると位置づけられてよいと思うのだが、はたしてこの包紙が今日の『遊心安楽道』研究に貢献しているかは甚だ疑問であるとせばなるまい。

本稿ではこの包紙に関する幾つかの問題点について検討してみたいと思う。

『遊心安楽道』来迎院本の包紙(愛宕)

## 二 包紙の表書

これまで『遊心安楽道』来迎院本の調査は昭和二年(一九二七)の東京帝国大学史料編纂所、昭和二十六年(一九五二)の龍谷大学仏教学会、昭和四十七年(一九七二)の文化庁文化財保護部美術工芸課の計三度が行われ、それ等の調査結果はそれぞれ

○東京帝国大学―『昭和二年京都府史料蒐集集目録二百八、来迎院如来蔵重書目録』(昭和二年、東京帝国大学)

○龍谷大学―横田兼章「良忍と融通念仏」(佐藤哲英『叡山浄土教の研究』研究編(昭和五十四年、百華苑)所収)、横田兼章「大原如来蔵における良忍上人関係資料」(融通念仏宗教学研究編『良忍上人の研究』(昭和五十六年、百華苑)所収)

○文化庁―『来迎院如来蔵聖教文書類目録』(昭和四十七年、文化庁文化財保護部美術工芸課)

としてまとめられたのであるが、包紙の表書に関する限りこれ等三機関の発表は

○東京帝国大学―(遊心安楽道<sup>新羅國・元曉撰・良忍之本</sup><sup>(2)</sup>)〔傍点筆者〕

○龍谷大学―(遊心安楽道<sup>新羅國・元曉撰・良忍之本</sup><sup>(3)</sup>)〔傍点筆者〕  
○文化庁―(遊心安楽道<sup>新羅國・元曉撰・良忍上人之本</sup><sup>(4)</sup>)〔傍点筆者〕

者)

と全く相違している。元来、村地哲明氏が、元曉入滅後に翻訳された『大宝積経』と『不空羼索神变真言经』の両経が『遊心安楽道』に引用されている点を理由に元曉偽撰説を主張されたのは、大正三年(一九一四)慶州より元曉の生存年(六一七―六八六)を記した「誓幢和上塔碑」の断石三片が発掘され、元曉の生存年が明確となった事に起因するものである。『高麗史』卷十一、肅宗六年(一一〇二)八月癸己の条に

詔曰。元曉義相<sup>6</sup>。東方聖人也。無碑記諡説。厥徳不暴。朕甚悼之。

とこの塔碑が早くより倒壊し埋没していた事を窺わせる記述があるのを見ても、少なくとも大正三年(一九一四)以前には元曉の明確な生存年は不明だったのであり、『遊心安楽道』は紛う方なき元曉の著述として認識されていたのである。もともと〈元曉撰〉に如何なる意味があるのか未だ判然としないうが、はたしてこれが元曉偽撰説を物語るものであるならば、現時点において村地氏指摘のそれ以外に元曉偽撰説を導き出す明確な根拠も見あたらぬ以上、この包紙が少なくとも大正三年(一九一四)以降に製作されたものでなければならなくなり、その場合、包紙の製作年の問題とも、また包紙に〈良忍之本〉と記されていたのであれば、他の包紙が来迎院

の開山良忍に対して等しく〈上人〉の尊称をもって記している点、さらに聖教文書類の中に〈青龍藏〉や〈勝林藏〉の墨書、三千院円融藏の典籍分類記号等、他の天台寺院との交流を窺わせるものが幾つか見られる点などから、包紙の製作者の問題とも関連してくる事となるのであるが、筆者が実際に来迎院において確認したところ、包紙には

〈遊心安樂道新羅國元曉撰良忍上人之本〉〔傍点筆者〕と記述されている事が判明した。<sup>(8)</sup>

### 三 包紙の製作年

『遊心安樂道』来迎院本の包紙に関して横田兼章氏は本文と同時期、すなわち平安後期のものであると、また韓普光氏は享保十六年(一七三二)に付されたものであるとされている<sup>(9)</sup>のであるが、何れも何を根拠としたのか明確でなく、到底賛同する事はできない。たしかに韓氏の論文にはこの来迎院本の修復を行った京都博物館古文書修理所が包紙を江戸期のものと発表している点、また文化庁が包紙に関して享保十六年(一七三二)の良忍六百年忌にあたり付されたものであるとの報告を行っている点の二点<sup>(10)</sup>がその論拠として挙げられているのだが、如何なる事か韓氏の言われる京都博物館古文書修理所、すなわち榊墨申堂京都国立博物館文化財保存修理所の唯一の報告書『美の修復—京都国立博物館文化財保存修理

『遊心安樂道』来迎院本の包紙(愛宕)

所創設十周年記念報告書(平成二年、修理者協議会)を見て、前述した文化庁の報告書を見ても、その様な記述はどこにも確認されないものである。そもそも享保十六年(一七三二)に良忍自筆手折類等、聖教文書類の中から特に重要と目されるもののみを記録した「来迎院靈宝古筆入目録」に『遊心安樂道』の名が挙げられていない点は、少なくとも享保十六年(一七三二)当時、この『遊心安樂道』が来迎院に存在しなかったか、もしくは来迎院に存在していたが良忍手折と認定されていなかったかの何れか<sup>(11)</sup>と見るべきであり、はたしてこの包紙を享保十六年(一七三二)あるいはそれ以前に製作されたものとするならば、そこに〈良忍上人之本〉と明記されている以上、包紙が他寺院において製作されたものである事を具体的に論証する必要があるのではなからうか。

ところで来迎院には「来迎院靈宝古筆入目録」の他にも

○『如来藏聖教目録』

○『如来藏本目録』—寛政十年(一七九八)

○『如来藏宝物目録』

○『如来藏宝物目録』(草稿本)—寛政四年(一七九二)

と四種の目録が現存している。この内『如来藏聖教目録』と『如来藏宝物目録』の二種については編録年が明確でないのだが、四種を一括した包紙に

〈仏像、道具、経巻、如来藏目録<sup>古</sup>三通通、外新目録草案〉

『遊心安楽道』来迎院本の包紙(愛 宕)

と寛政四年(一七九二)の『如来蔵宝物目録』(草稿本)を〈新〉、さらに他の三種を〈古〉一種、〈新〉二種として分類している事から、草稿本の浄書である『如来蔵宝物目録』およびその六年後に編録された『如来蔵本目録』を共に〈新〉、残る『如来蔵聖教目録』を〈古〉、すなわち『如来蔵宝物目録』が寛政四年(一七九二)頃に編録されたもの、また『如来蔵聖教目録』がそれよりかなり以前に編録されたものと見てよからう。『遊心安楽道』の名はこれ等四種の目録の中、『如来蔵聖教目録』と『如来蔵宝物目録』(草稿本)の二種に記されているのであるが、何れも良忍手扱としては扱われておらず、草稿本に記述されていながら浄書ではその名が除外されているなど、寧ろ非常に軽視されていた様にも感じられるのである。然らば少なくとも寛政十年(一七九八)以前、この『遊心安楽道』が良忍手扱とされていた可能性は明らかに否定されるべきであり、包紙の製作年は必然的にそれ以降に限定される必要があるのではなからうか。

#### 四 おわりに

来迎院の聖教文書類蒐集作業が明治期まで継続されていた事は、現存する聖教文書類五四七種九、三四二紙の時代別分類

平安期——二二五種

鎌倉期——六四種

室町期——二二七種

安土桃山期——一八種

江戸期——二二二種

明治期——一種

からも明白である<sup>(15)</sup>。包紙もその都度付されたものであるため、奥書もなく詳しい経緯が何一つ明らかでない現状において、『遊心安楽道』の包紙が何時製作されたものであるのか一概に論じる事は残念ながら不可能であるとすべきであろう。しかしながら今回、包紙の表書と五種の目録に着目する事によって『遊心安楽道』の包紙が少なくとも寛政十年(一七九八)以降に製作されたものである点、またそれ以前にはこの『遊心安楽道』が良忍手扱とは考えられておらず、寧ろ非常に軽視されていた存在だった点の二点が明らかとなった。然らば来迎院如来蔵が

忍建<sup>二</sup>字<sup>一</sup>。庚<sup>三</sup>大蔵経律論。名曰<sup>二</sup>如来蔵<sup>一</sup>。所<sup>レ</sup>持<sup>レ</sup>弥陀経時放<sup>レ</sup>光。其徒収<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>置<sup>二</sup>藏中<sup>一</sup>。

と『元亨釈書』(一三三二)にも取り上げられた著名な経蔵であったにもかかわらず、南都北京に浄土宗籍を求め続けた義山(一六四七—一七一七)以降も義海(一一七五)が『遊心安楽道私記』(一七四九)の序に

唯其書。文字訛脱甚多。殆乎不可<sup>レ</sup>通晓。而未<sup>レ</sup>獲<sup>二</sup>善本<sup>一</sup>。

と記すなど、法然が浄土宗なる宗名を名のる典拠としても使用し、浄土宗僧にとつては正しく垂涎の的だったと言つてよい『遊心安楽道』の善本（来迎院本）、がその後の『遊心安楽道』研究に何等貢献しなかった点も、あるいはこの来迎院本がその経緯すら明確でない非常に不透明な存在であると認識されていた事に起因するものと見るべきなのかもしれない。はたして〈良忍上人之本〉が真実だったのか否か現時点において我々にそれを確認し得る術は全くない。しかしその真偽の如何が何等この『遊心安楽道』来迎院本の重要性を貶めるものでない事は明白であると言えよう。

- 1 『来迎院如来藏聖教文書類目録』（昭和四十七年、文化庁文化財保護部美術工芸課）一〇頁―二二頁。
- 2 『昭和二年京都府史料蒐集目録二百八、来迎院如来藏重書目録』（昭和二年、東京帝国大学）二頁。
- 3 横田兼章「大原如来藏における良忍上人関係資料」（融通念仏宗教学研究編『良忍上人の研究』、昭和五十六年、百華苑）三二頁、三四頁。
- 4 註(1)
- 5 村地哲明「『遊心安楽道』元暁作説への疑問」（『大谷学报』三九巻四号、昭和三十三年）四五頁―四六頁。
- 6 『高麗史』（昭和五十二年、国書刊行会）第一、一六六頁。文化庁前掲書「来迎院如来藏について」一五頁―一六頁。発表時には写真を提示した。
- 7 横田氏前掲論文、三二頁。
- 8 韓泰植「来迎院本の『遊心安楽道』について」（『印仏研究』

『遊心安楽道』来迎院本の包紙（愛宕）

三七巻、二号、平成元年）一四四頁。韓普光『新羅浄土思想の研究』（一九九一、東方出版）一三二頁。

11 文化庁前掲書「来迎院如来藏について」、一〇頁―一一頁。文化庁前掲書、三七九頁―三八二頁。

12 註(12)

13 『如来藏聖教目録』一〇紙二行、『如来藏宝物目録』（草稿本）四紙二六行。何れも筆者の調査による。

14 『美の修復―京都国立博物館文化財保存修理所創設十周年記念報告書』（平成二年、修理者協議会）一六七頁―一七二頁。

15 また聖教文書類の総数について東京帝国大学は三九三種を、文化庁は五四〇種を報告しており、この点においても各機関の発表は相違している。

16 『国史大系』三一巻、一七二頁。  
『浄全』続七巻、二二五頁。

『遊心安楽道』来迎院本の調査に際しては蓮成院齋藤孝圓上人に大変お世話になった。ここに記して感謝の意を表したい。

〈キーワード〉『遊心安楽道』、来迎院聖教文書類、良忍

（愛知学院大学大学院）